ISSN 2185-341X

紀要

高島市仏性寺遺跡出土縄文土器の再検討（１）…… 小島　孝修（１）

布留式併行期の受口状口縁甕について…… 伊庭　功　（15）

市三宅東遺跡の鏃形石製品とその意義…… 宮村　誠二（25）

滋賀県内の出土事例からみた斎串の一例について
ー上御殿遺跡の調査成果からー…… 中村　智孝（35）

滋賀県内における猿投窯産須恵器の流入
ー貯蔵器種を中心にー…… 髙島　悠希（41）

条里地割からみる佐和山城下町の形成過程…… 山口　誠司（53）

三次元計測の実験的試行
ー等高線図の作成とオルソ画像の作成ー…… 福井　知樹・三好　佑佳（62）

39

公益財団法人滋賀県文化財保護協会　2026. 3

滋賀県内における猿投窯産須恵器の流入

―上御殿遺跡の調査成果から―

髙 島 悠 希

目次

１．はじめに
２．研究史とその問題点
３．滋賀県内出土の猿投窯製品
４．滋賀県内における猿投窯製品流入の背景
５．おわりに

― 論 文 要 旨 ―

猿投山西南麓古窯跡群（以下、猿投窯とする）は、愛知県の尾張地域に点在する須恵器窯跡群である。その範囲は、西は名古屋市東部、北は瀬戸市南部、東は豊田市西部、南は刈谷市北部にかけての直径約20kmで、古墳時代から平安時代にかけての約1,000基もの窯が、これまでの調査で発見されている。猿投山西南麓古窯跡群の名は、須恵器窯調査の萌芽期である1950年代に名付けられ、愛知県の瀬戸市と豊田市との間にそびえる「猿投山」の西南方向の麓に古窯が分布していることが想定されたことから、その名が澄田正一によって命名された。猿投窯における須恵器生産の開始期については各研究者によって意見は異なるが、東山111号窯の操業を嚆矢として5世紀中期前葉～中期中葉頃とされ、大阪府に点在する陶邑古窯跡群（以下、陶邑窯とする）の開窯期よりもいささか遅れての操業である。

滋賀県は上述した猿投窯と陶邑窯との間に位置し、双窯からの須恵器の流入が想定される。そこで、実際に滋賀県内において、どの程度の猿投窯産須恵器が流入しているのかについて、筆者の主な研究対象である甕や壺といった貯蔵器種に注目して検討を深めた。検討の結果、滋賀県の北部地域と南部地域において、少数ながら猿投窯産と考えられる須恵器貯蔵器種が認められた。北部地域における製品の流入の背景は、遺物の出土地域と時期の検討から、継体大王勢力基盤の一氏族とされる尾張氏と、同じく継体大王勢力基盤とされる坂田・息長氏族との地域間交流によるものと想定している。南部地域における製品の流入の背景は、大津京の遷都に伴い倉歴道を通じた交通路が整備されたことで、尾張から鈴鹿を通過し伊賀から近江へというルートを使用した猿投窯産製品の運搬（尾張から大津京へ）によるものと想定した。

――――　キーワード
須恵器　猿投窯　貯蔵器　甕

1.はじめに

筆者が須恵器の貯蔵器種を主たる研究対象として取り組む理由は、以下の2点である。それは、1）従来における猿投窯(1)研究はもとより全国的にみても、須恵器研究の対象は杯身・杯蓋をはじめとした供膳具が主体で、貯蔵器種については検討の余地が残ること、2）壺や甕といった大型の製品は、形状や製作技法において地域色が目立ちやすく、産地同定に適した器種であること、である。

須恵器貯蔵器種の関心度が低い理由はいくつか考えられる。まず、発掘調査で須恵器貯蔵器種が完形の状態で出土することは稀で、胴部のみや口縁部のみといったように破片で出土することが多い。胴部破片のみでは、遺物そのものやそれに伴う遺構の時期特定も困難である。仮に、運良く完形ないしは口縁部が残存するというような時期特定可能な個体が出土したとしても、そもそも須恵器貯蔵器種自体が、供膳具と比較しても時期差を示す属性の変化が乏しいとの指摘（小田2019）や、甕の耐久性に伴い長期間に渡って使用される場合があるとの指摘（津野2017）などから、それ単体での考察は慎重にならざるを得ない。加えて、破片の接合・実測作業に時間のかかることや、保管に大きく場所をとり、収蔵庫の奥に追いやられて日の目を浴びず忘れ去られていく場合が多いことも、その要因の一つであろう。これらが相まって、全国的にみても各須恵器窯の貯蔵器種の編年案の作成は低調である。

従来の猿投窯の研究史の中でも須恵器の貯蔵器種が脚光を浴びなかったのは、上述した内容に加えて、ことに5世紀から6世紀にかけての生産遺跡において、状態の良い貯蔵器種の出土がほとんど認められない点も原因であると筆者は考えている。

しかしながら近年、須恵器貯蔵器種についての検討が活発になってきている。1990年代後半から2000年代前半にかけては、北陸古代土器研究会において須恵器の甕・壺が研究の対象として大きく取り上げられ、その製作技術、器形や容量の変遷、消費地遺跡での出土状況といった検討が深められた（北陸古代土器研究会1999など）。2018年の独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所が開催した古代官衙・集落研究会の第22回研究集会「官衙・集落と大甕」では、官衙で集中的に出土する須恵器貯蔵器種を取り上げ、甕の製作・流通・使用・廃棄の実態についての検討が深められている（奈良文化財研究所2019）。その他にも、貯蔵器種に関連した多種多様な論考が世に出ている（木村1999、仲辻2012、高橋2015、望月2017、中久保2019、庄田2024など）。

上述した第22回研究集会「官衙・集落と大甕」では、大甕をはじめとした須恵器貯蔵器種は、「製作から使用・廃棄に至る痕跡をとどめており、出土状況を踏まえることで遺跡の性格づけにも関わる貴重な情報を内包した遺物（奈良文化財研究所2019開催趣旨（原文ママ））」と述べられており、貯蔵器種の検討は須恵器研究の中でも重要視されるべき項目の1つであるといえよう。

こうしたことを踏まえて、貯蔵器種が産地同定や工人系譜の考察に適していると筆者は考えている。壺や甕の口縁端部形状の検討はその1つで、機能として直接に関係のない口縁端部は、製作する担い手の個性（地域色）が形状として最も顕著に現れる。杯身や杯蓋というような小型の器は、実測図上はもちろんのこと、実際に観察しても豊富な知識がなければ産地同定は非常に難しいだろう。しかしながら壺や甕は、器が大きいことも相まって口縁端部形状の独自性を認知しやすく、各地域の須恵器窯によってその形状は様々である。となれば、生産窯やその周辺地以外の消費地遺跡ないしは古墳などで出土した貯蔵器種の産地同定は、製品の広域流通解明や古墳被葬者の性格を窺う一助となる。近年、都城の発掘調査では、多種多様な口縁端部形状を有する多数の須恵器甕の出土が報告されており、それらの製品がどの地域からそれぞれ持ち運ばれたのか気になるところである。また口縁端部のみならず、頸部の装飾や胴部の内外面の製作技法にも地域色が認められると筆者は考えているが、完形出土の機会が少ない須恵器甕は、とりわけ胴部についての議論が低調である。実際に猿投窯で製作された製品は、仮に胴部破片のみの観察であっても、猿投窯産（猿投系）と特定できる場合がある。

本稿では、須恵器貯蔵器種の口縁端部形状や製作技法に焦点をおいて、滋賀県内から出土している貯蔵器種をはじめとした須恵器について、検討を進めていきたい。

2.研究史とその問題点

(1) 猿投窯産須恵器流入の想定（図1）

筆者が滋賀県内に猿投窯産の須恵器が流入していると想定した理由としては、1）全国的にみても早い時期から須恵器生産を操業し継続していた猿投窯が、滋賀県に比較的近い位置にあること、2）滋賀県の高島地域ないしは福井県の越前地域を拠点とした継体大王は、尾張の豪族である尾張連草香の娘「目子媛」を最初の妃としたとされている点から、両地域間の交流を窺えること、3）猿投窯で生産された製品を都城へ貢納、運搬する際の交通ルートを考えたときに、滋賀県を通過する可能性が考えられること、の3点である。

1）について述べると、滋賀県内での須恵器生産開始は、5世紀末葉に開窯とされる泉窯（滋賀県甲賀市）まで待たなければならず、ことにそれ以前に滋賀県内の各遺跡から出土する須恵器は、陶邑窯ないしは猿投窯で製作された製品の蓋然性が高い。そして6世紀以降、鏡山古窯跡群（滋賀県野洲市・竜王町）を代表として滋賀県内各地に須恵器窯が築かれるが、近場にある生産力の大きい猿投窯の製品は、3）の理由とも相まって滋賀県内の各地に持ち運ばれたとまずは想定したい。

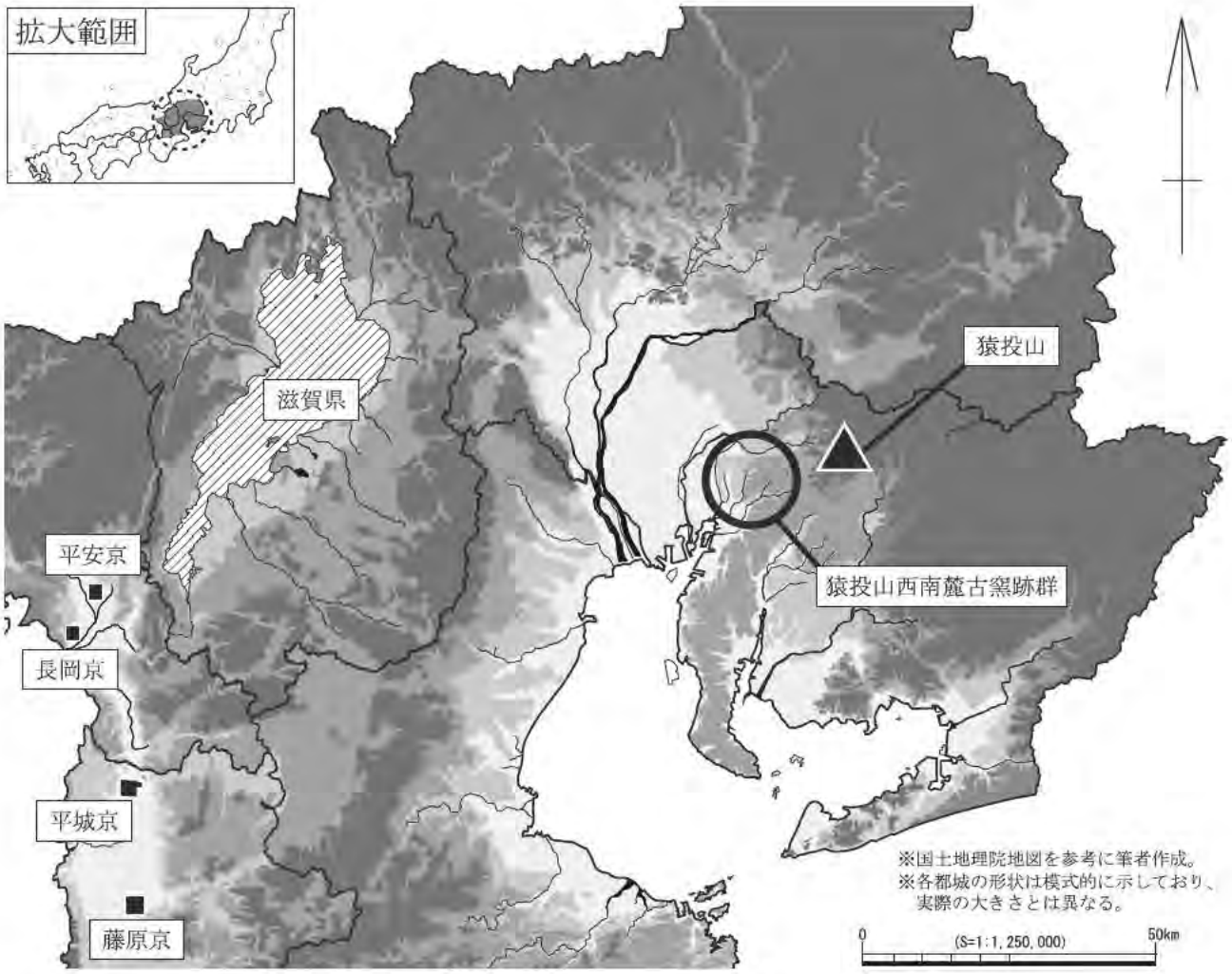


図1 滋賀県と猿投窯の位置関係

2）については、継体大王が目子媛を最初の妃とした点からも、尾張氏族は継体大王擁立を支えた豪族の1つであろう。継体大王の即位は6世紀初頭（西暦507年）である。継体大王と尾張氏の接触や関係性が一朝一夕で培われたとは考えにくく、即位以前から何らかの繋がりがあったのではないだろうか。こうした即位以前における、もしくは即位以後における地域間交流想定の中で、高島地域もしくは越前地域に、また両地域を結ぶ交通ルートの中に猿投窯製品の搬入を想定したい。

3）については、藤原京や平城京をはじめとした都城では、猿投窯の製品が出土している。このことから窺えるのは、猿投窯で生産された製品が都城へ貢納、運搬されている点である。須恵器を運ぶために尾張地域から都城へ赴く際には、三重県を横断するルートもしくは滋賀県を通過するルートが考えられる。特に大甕といった大型の製品を持ち運ぶ際、粗悪な険道や悪道を通ることは製品破損のリスクがあるため、当時の人々が日常的に使用していた道を使用すると思われる。律令期以降、中央と地方とを結ぶ官道の整備や駅家の設置、いわゆる五畿七道が展開され交通体系の網目が構成された。今回対象とする時期は、律令期以前（五畿七道整備以前）が中心ではあるものの、上述したように当時の人々が日常的に使用していた道を基軸に官道の整備が行われたと考えられるため、五畿七道整備以前においても、ある程度の「道」が存在していたものと想定し、同時に滋賀ルートと三重ルートを使用した猿投窯製品の移動を想定した。

(2) 研究史

滋賀県内における猿投窯産製品の流入の検討については、いくつかの研究がある。その嚆矢は、岩崎直也氏による近江出土における古式須恵器の系譜の検討である（岩崎1985·1986）。特に5世紀代における須恵器を対象とし、陶邑窯以外の製品が滋賀県内の各遺跡から出土していると想定した。その系譜の一例として尾張地域の須恵器を挙げると同時に、尾張地域特有の地域色を有する須恵器の一群を「尾張型須恵器」として提唱している（岩崎1987）。また大西遼氏は、滋賀県長浜市に所在する神宮寺遺跡および越前塚遺跡において、実際に猿投窯産の須恵器を見い出し、

滋賀県における猿投窯製品の広域流通解明への一助とした（大西2015）。なお、須恵器を対象とした検討ではないものの、滋賀県長浜市に所在する垣籠（かいごめ）古墳では、尾張型埴輪の出土も指摘されている（辻川2003）。

(3) 産地同定の手法と問題点

尾張地域で焼成された須恵器は、先学諸氏によってその独自性が唱えられている（田辺1971、斎藤1983、岩崎1987、伊藤2004、中里2014、大西2017など）。その須恵器に認められる尾張の地域色を基に、各遺跡で出土した須恵器を対象として比較検討し、産地同定、すなわち尾張で生産された製品がどうかを判断する。しかしながら、今回筆者が主として取り扱う貯蔵器種の独自性（地域色）の検討については、従来の猿投窯研究の中ではあまり進められていないようである。そこでまず、尾張地域で生産された貯蔵器種の地域色について簡単にまとめていきたい。

(4) 猿投窯産須恵器貯蔵器種の地域色（図2）

現在、筆者が考えている製作技法に焦点を当てた猿投窯産貯蔵器種の独自色（地域色）は、以下の7点である。

A）胴部内面に明瞭な同心円の痕跡が認められない。
B）胴部外面は平行叩きで統一される。
C）胴部外面の平行叩きの方向が統一されていく（正面から見た際に、平行文が右肩上がり）。
D）頸部外面および胴部外面にカキ目を施さない。
E）胴部外面に沈線を施す場合がある。
F）頸部および胴部に「二子線」を用いる場合がある。
G）黄土を塗布する場合がある。

上述した内容について順次説明したい。

まず、Aはそもそも初源期における胴部製作時の内面の特徴で、陶邑窯をはじめ各地で操業した初期の須恵器窯では、明瞭な同心円の痕跡は認められない。この点は猿投窯も同様である。5世紀末～6世紀初頭以降、陶邑窯や新たに各地で操業を開始した須恵器窯では、貯蔵器の胴部内面に明瞭な同心円の痕跡が認められるようになる。これは当該期から胴部内面に使用する「木製当て具」の表面において、意図的に同心円を刻むことが要因で、その工具を使用した際には当然、胴部内面に明瞭な同心円が痕跡として残る。

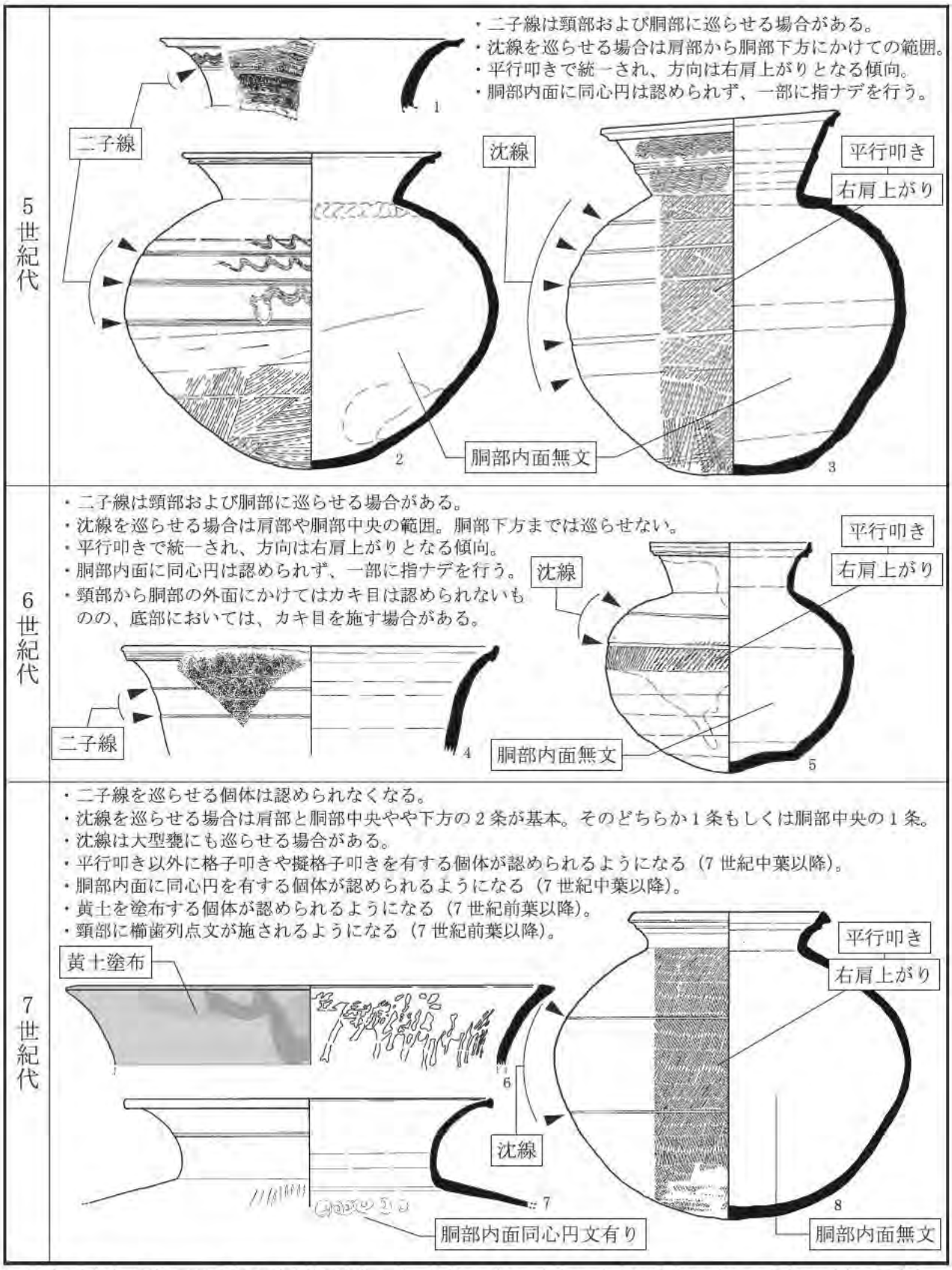
一方で猿投窯における須恵器貯蔵器種の製作では、5世紀末～6世紀初頭以降においても明瞭な同心円の痕跡は認められない。ここでいう「明瞭」というワードが留意すべき点で、猿投窯においても微弱な同心円の痕跡は認められる製品がある。しかしながら、この微弱な同心円の痕跡は、平滑な無文「木製当て具」が経年劣化に伴って木の年輪が表出したことによる痕跡が残ったものであり、斜光などを当て熟察しなければ確認できない程度の痕跡である。したがって、先述した表面に意図的に同心円を刻んだ「当て具」の使用とは意を異にする。なお、猿投窯において上述した同心円の痕跡が認められないのは7世紀中葉までで、この時期以降の尾張地域の窯では、従来通りの同心円の痕跡が認められない貯蔵器種と新たに明瞭な同心円の痕跡を残す貯蔵器種とが共存するようになる。これは尾張地域の須恵器窯に外部からの工人が流入してきたものと筆者は考えている(2)。

外面においても猿投窯の特徴が注目される。まず、胴部外面は平行叩きで統一され、格子叩きや擬格子叩きはほとんど認められない。しかし、7世紀中葉以降は、格子叩きや擬格子叩きが認められるようになる。先述と同様に、尾張地域の須恵器窯に、外部からの工人が流入してきたものと筆者は考えている。合わせて、平行叩きの方向が6世紀以降に漸次統一され、正面から見た際に平行文が右肩上がりとなる（底部は異なる）。一方で、他地域の須恵器窯で生産された平行線文を有する貯蔵器種は、文様が縦に近い方向で叩かれている場合が多い印象である。

また、頸部外面および胴部外面にカキ目を施さない点も、当地域の須恵器貯蔵器種の特徴といえよう。陶邑窯をはじめとした須恵器窯では、胴部や頸部外面の制作時にカキ目を施す個体が一定数ある。一方で猿投窯ではこの技法は認められず、仮に横方向のラインを施す場合には、カキ目に代わって胴部外面に沈線を巡らす。この沈線は時期によってその施す箇所が異なり、5世紀には小型や中型の貯蔵器に限って胴部全体に一定の間隔をあけながら施され、6世紀以降は肩部から中央部ないしは肩部のみに施される。大型の甕には認められない。7世紀以降は小型や中型に加え、大型の甕にも沈線を巡らせるようになり、その箇所は肩部と、底部に比較的近い胴部との2本、ないしはそのどちらかの1本となる。沈線を施す技法自体は、韓半島南部由来の技法で、初期に製作された須恵器貯蔵器に認められる技法ではあるが、それ以降の全国各地の須恵器窯では、こうした沈線を巡らせる製品は生産していないようである。

もちろん、貯蔵器種全てに必ず沈線やカキ目を施すとは限らないことから、沈線やカキ目を施す個体とそうでない個体とは併存（両方とも生産）していたこととなる。例えば、発掘調査で出土した須恵器甕を観察した際に、陶邑窯等で認められるカキ目技法が認められないからといって、直ちに「陶邑窯産ではなく猿投窯産である」とは断定できない。それは上述したように、陶邑窯や猿投窯、その他の須恵器窯においてカキ目技法を施さない個体も製作しているためである。しかし、ことに5世紀後葉から6世紀以降の個体で沈線を巡らせる須恵器甕であれば、猿投窯産の可能性が高い。逆にいえば、カキ目技法を施す個体であれば、猿投窯産の可能性は非常に低いということになる(3)。

最後に「二子線」と「黄土」について説明したい。二子線（二子平行線文）は、2本1単位の平行した細い線が沈線化したもので、伊藤禎樹氏によって尾張地域特有の技法として紹介された（伊藤2004）。甕や壺・甕の胴部および



1：尾張元興寺跡 2：東山111号窯 3：東古渡町遺跡 4：蝮ヶ池窯 5：茶臼山古墳 6：岩崎17号窯 7：東山50号窯 8：志賀公園遺跡

※各項目の特徴に対して例外もある。口縁端部形状および土器のプロポーションも併せて上記諸特徴を多面的に捉える必要がある。

※上に示した須恵器甕の実測図のスケールは以下の通りである。1・2・3・8：S=1:4、5：S=1:2、4・6・7：S=1:6

※上に示した須恵器甕の実測図は筆者が外形線および中心線を再トレースし、断面を黒塗りで統一している。

図2　猿投窯須恵器甕の地域色

頸部、器台などといった器種の表面に認められる。おそらく、ブレのない波状文を施すための補助線として、波状文自体の縦幅やその範囲を決定するための補助線として巡らせるものであろう(4)。主に5世紀～6世紀代に製作された須恵器に認められる。

黄土は、酸化第二鉄(Fe2O3)を多く含むもので、猿投窯の須恵器の器面に人為的に塗布される場合がある。近年、その主成分について詳細に検討されており(尾野・降幡2023)、黄土を釉薬とはみなさず、化粧土の範疇で評価を下している。実際に猿投窯における黄土を塗布された須恵器の出現は7世紀前葉(東山15窯式期)と考えており(高島2024)、他地域の須恵器窯では看取できない尾張地域特有のものである。黄土の塗布が認められる器種は主に貯蔵器種で、塗布される箇所は様々である。焼成温度が低いと赤褐色を呈し、焼成温度が高いと艶のない黒褐色を呈する。

以上、猿投窯産須恵器貯蔵器種の7つの特徴について述べてみた。本来であれば、各項目で詳細な検討を記すべきであるが、紙面の都合上ここでは控え、今後、別稿においてより詳細な内容を示していきたい。このように猿投窯産須恵器貯蔵器種の特徴について整理した上で、滋賀県内の各遺跡から出土した須恵器が猿投窯で生産されたものかどうか判断する。上述した諸特徴を多面的に考察すると同時に、口縁部形状にも着目をして産地同定をおこなおう。

3.滋賀県内出土の猿投窯製品

(1) 二子線を有する須恵器(図3)

実際に滋賀県では、上記のFで説明した尾張地域特有の技法である「二子線」を巡らせる須恵器が出土している。大西氏が示した滋賀県長浜市の越前塚遺跡出土の須恵器壺をはじめ(図3-8)、同じく長浜市に所在する黒田長山古墳群8号墳の周溝からは甕が出土している(図3-6･7)。6･8は口縁部が失われているため正確な時期を断言することは難しいが、7の甕の形状と黒田長山古墳群のその他の出土品とを鑑みて、甕(図3-6･7)は5世紀後半頃のものとして考えたい。8の壺については、二子線(沈線)が壺の胴部全体に巡らない点や叩きの方向が斜め方向に統一されている点から、6世紀代の所産と考えたい。

現在のところ二子線を有する須恵器は、上述した遺跡以外では確認できず、長浜市を中心とした湖北地域のみでの確認である。特に5世紀代の須恵器製品は滋賀県内においても当地域にしか認められないようで、器種としては上述した黒田長山古墳群出土の甕に加え、神宮寺遺跡出土の杯身･杯蓋･無蓋高杯などが知られている(大西2015)。

(2) 須恵器貯蔵器種―窯跡資料との比較検討を通じて―(図4)

続いて貯蔵器種に注目したい。上述した猿投窯製品の特徴と窯跡資料との比較検討とを通じて、実際に滋賀県内から出土している須恵器の中で、筆者が猿投窯産(猿投系)の須恵器と考えている製品を図4に示した。

図4-1は、滋賀県甲賀市に所在する植遺跡から出土した須恵器甕である。当甕は竪穴建物内の柱穴から出土しており、混入品と報告されている。頸部から口縁端部にかけて斜め上方向に外反する。口縁端部は斜め上につまみ上げられ、端部からわずかに下った箇所に鈍い突帯が認められる。わずかに残る肩部内面には同心円の痕跡はなく、器面が丁寧にナデられる。当口縁端部の形状が猿投窯編年の東山44号窯式期の須恵器甕に類似することや、同心円の痕跡が認められないことから、猿投窯産の可能性がある。

図4-2は、滋賀県大津市に所在する近江国府跡から出土した須恵器甕である。頸部から口縁部にかけて斜め上方向に立ち上がる。口縁端部は上方と下方とにそれぞれつまれ、両突形状となる。近似した形状を有する須恵器甕が、猿投窯標式窯である岩崎17号窯や同時期の窯から出土していることから、7世紀後葉の所産であろう。

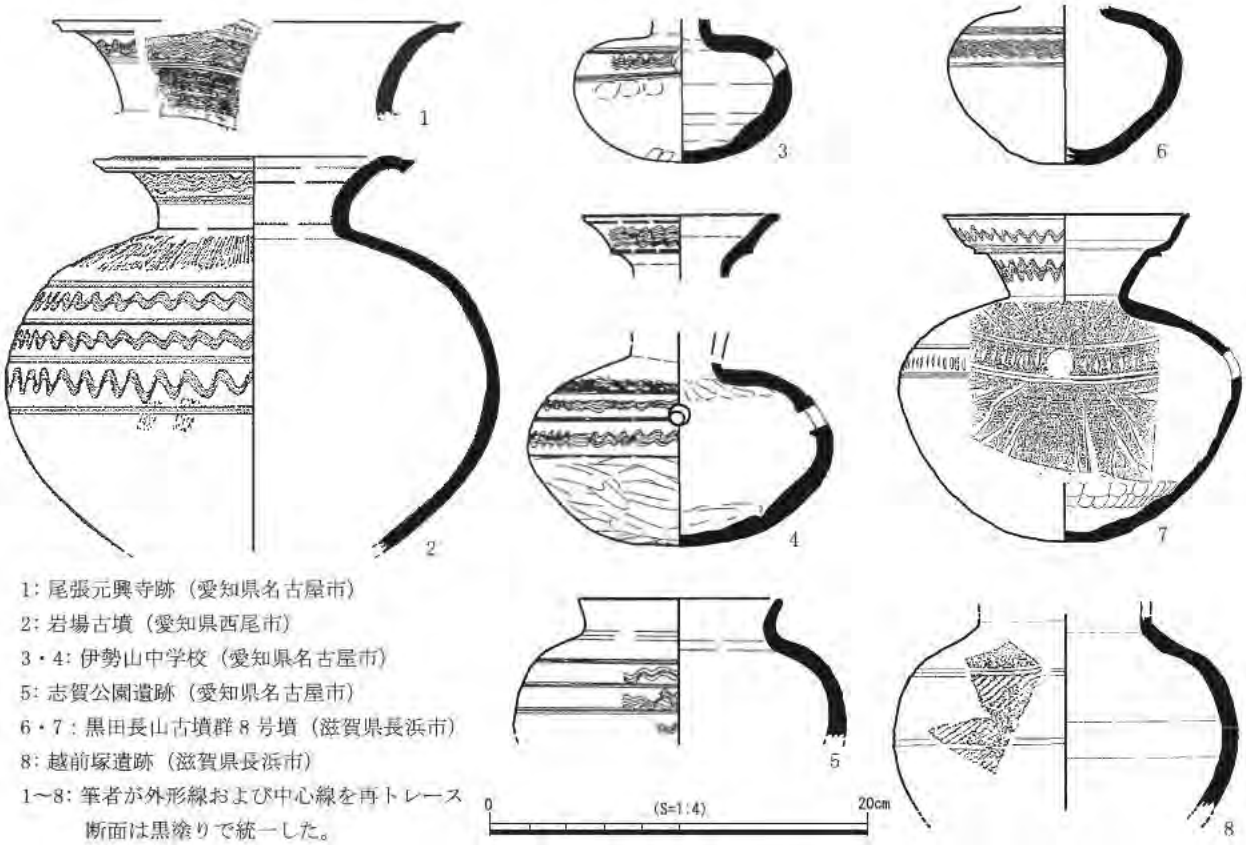
図4-3は、滋賀県東近江市に所在する野瀬遺跡から出土した須恵器甕である。頸部から口縁部にかけて斜め上方向に立ち上がり、口縁端部は下垂させ「へ」の字状を呈することが特徴である。近似した形状を有する須恵器甕が、猿投窯標式窯である高蔵寺2号窯や同時期の窯から出土していることから、8世紀初頭の所産であろう。

(3) 黄土塗布痕跡が認められる須恵器甕(図5)

滋賀県大津市に所在する南滋賀遺跡では黄土が塗布された須恵器甕の口縁端部破片が出土している。実際に観察すると、黄土が散布している状況である。おそらく、当口縁端部の下方において、泥漿(黄土)を多く染み込ませた刷毛工具で強い力を用いて器面を押し当てた結果、周囲に飛び散った痕跡と考えられる。また、破片左下部には、刷毛工具で黄土を塗りのばした痕跡も認められる。猿投窯で焼成された須恵器貯蔵器種を観察すると同様な痕跡が多く認められることや、当製品の胎土と色調との観察から、猿投窯で焼成された須恵器甕で間違いないであろう。

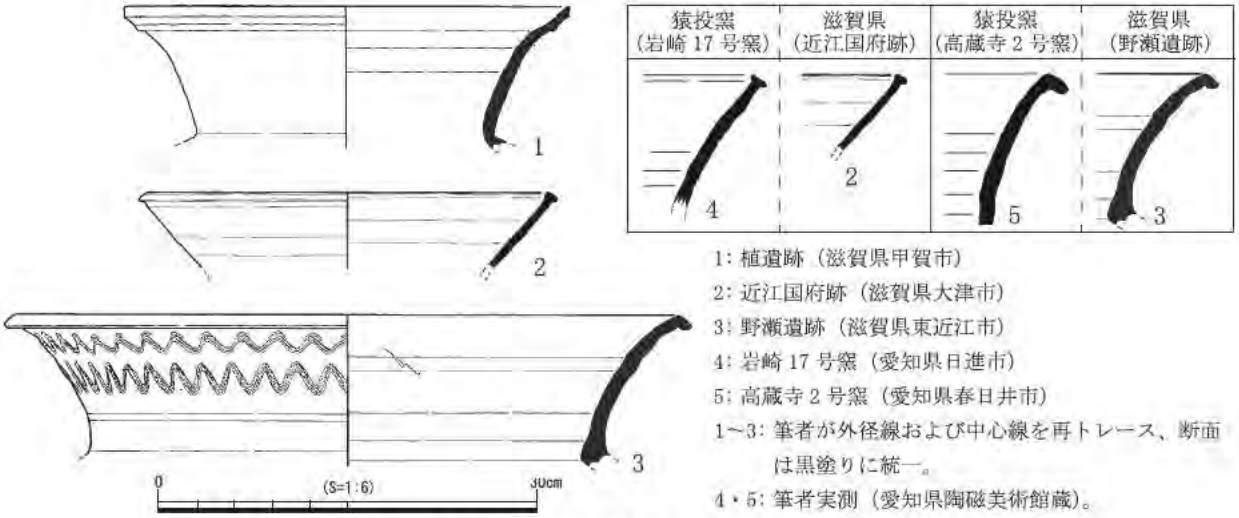
4.滋賀県内における猿投窯製品流入の背景(図6)

以上、滋賀県内における猿投窯産須恵器について主に須恵器貯蔵器種を対象として述べてみた。その分布図を表すと図6のようになる。都城へ猿投窯製品を運搬する際には、冒頭で述べたように滋賀県を通過するルートと三重県を通過するルートが想定される。そこで本図では、滋賀県における猿投窯産須恵器の流入状況とその運搬ルートをより把握するため、他県との比較検討も視野にいれて、滋賀県内および三重県内における猿投窯産須恵器の分布を表してみた。



1：尾張元興寺跡（愛知県名古屋市）
2：岩場古墳（愛知県西尾市）
3・4：伊勢山中学校（愛知県名古屋市）
5：志賀公園遺跡（愛知県名古屋市）
6・7：黒田長山古墳群８号墳（滋賀県長浜市）
8：越前塚遺跡（滋賀県長浜市）
1～8：筆者が外形線および中心線を再トレース
断面は黒塗りで統一した。

図３　愛知県内および滋賀県内で出土した二子線を有する須恵器（伊藤 2004、大西 2015 をもとに）

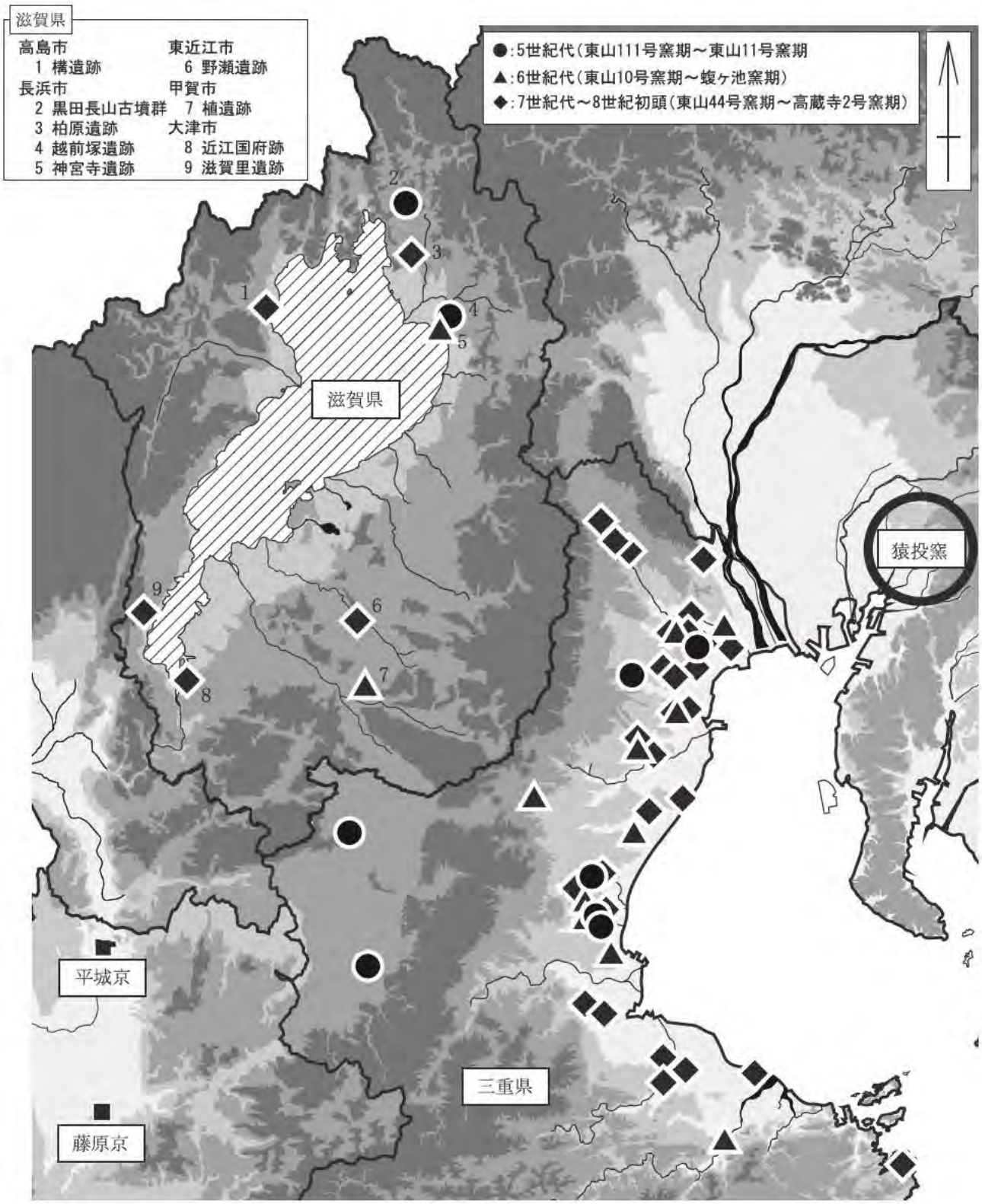


1：植遺跡（滋賀県甲賀市）
2：近江国府跡（滋賀県大津市）
3：野瀬遺跡（滋賀県東近江市）
4：岩崎 17 号窯（愛知県日進市）
5：高蔵寺２号窯（愛知県春日井市）
1～3：筆者が外径線および中心線を再トレース、断面は黒塗りに統一。
4・5：筆者実測（愛知県陶磁美術館蔵）。

図４　滋賀県内出土の猿投窯産と思われる須恵器甕と口縁端部形状の比較

※1・2：公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2024
※2 は実測図１の写真図版である。

図５　南滋賀遺跡出土の猿投窯産須恵器甕



※三重県における猿投窯製品が出土した遺跡の名称は、省略した。
※愛知県・岐阜県・奈良県・京都府における猿投窯製品出土の分布は、省略した。

0 (S=1:750,000) 40km

図6　滋賀県および三重県における猿投窯産須恵器甕の分布

(1) 滋賀県および三重県における猿投窯製品の分布状況

まず滋賀県内の分布状況をみてみると、高島市や長浜市といった北部地域と東近江市や甲賀市・大津市といった南部地域とにその分布は限られる。ことに5世紀代の製品は、現在のところ湖北地域のみの出土で、他の地域には認められない。他方、7世紀後葉から8世紀初頭にかけての時期の猿投窯産須恵器は、北部地域と南部地域とに分布がみられる。全体では、湖東地域の丘陵部や平野部、湖岸付近には猿投窯の製品は認められず、分布の空白があることを念頭に置いておきたい。三重県の猿投窯製品の分布状況と比較すると、滋賀県内における猿投窯製品の出土数は希薄である。

次に三重県の分布状況を確認してみよう。三重県では太平洋側の平野部を中心に猿投窯製品が分布しており、5世紀～8世紀初頭を通じて出土例が認められる(5)。内陸部では伊賀地域に出土例がある。5世紀および6世紀における須恵器の出土数は少量で、7世紀以降は大きく増加する傾向にある。滋賀県の猿投窯製品の分布状況と比較すると、三重県内の出土数は非常に多いことが理解できる。

(2) 滋賀県湖北地域における猿投窯製品流入の背景

滋賀県内出土の5世紀代の猿投窯製品は、北部地域のみに認められ、どうやらその他の地域には持ち込まれていないらしい。ことに5世紀代の製品が滋賀県内において当地域のみにしか認められない点も、製品の流通の痕跡として考えるにはためらう。猿投窯産の須恵器が5世紀から6世紀にかけて、当地域のみに出土する理由を考えたい。

猿投窯産製品の出土が認められる神宮寺遺跡および越前塚遺跡が所在する東部には、横山丘陵と呼ばれる丘陵部が聳える。横山丘陵南部には、定納古墳群や奥深古墳群といった古墳群と山津照神社古墳をはじめとした単体の古墳とが点在しており、総じて息長古墳群と称される（宮崎2000）。横山丘陵北部には龍ヶ鼻古墳群や先述した垣籠古墳をはじめとした古墳が点在しており、横山北部古墳群と称される（宮成・森口1996）。

さて、横山丘陵南部周辺は古代豪族である息長氏が本拠地としていた地域である。息長氏は、天皇家に后妃を入れ、親族として国政や修史事業に携わったとされ、その1つに継体大王との政治的な関わりが指摘されている（大橋1996）。継体大王の妃や父系系譜には「息長氏」の名がみえることから、息長氏は継体大王の支持基盤勢力であり、加えて、継体大王の最初の妃となった尾張連草香の娘である目ノ子媛が尾張出身であり、継体大王支持基盤と考えられる尾張と継体大王の拠点であった滋賀県の高島地域ないしは福井県の越前地域との交通の要衝に当本拠地があることからも、息長氏の重要な役割が窺える。

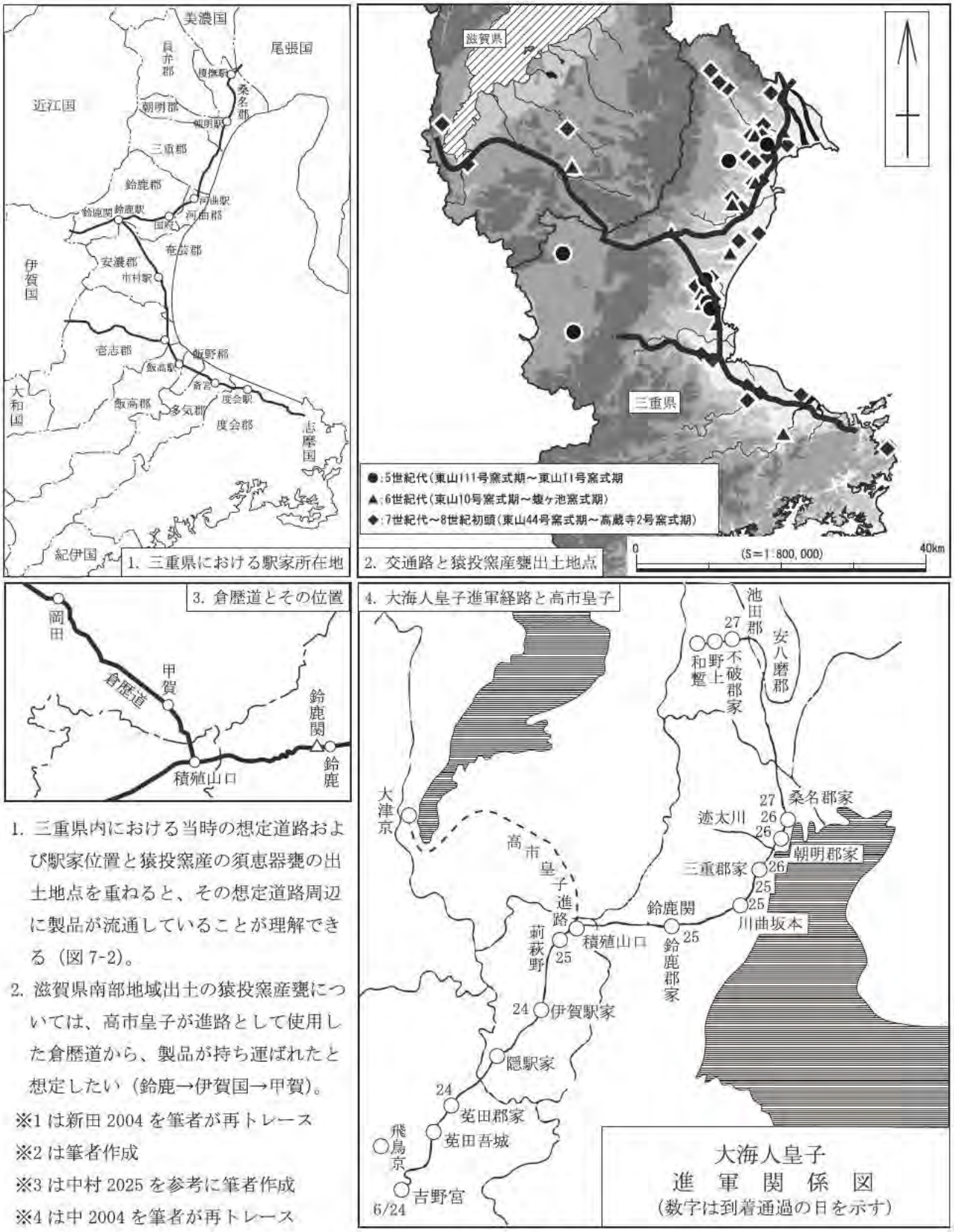
また、横山丘陵北部周辺は古代豪族である坂田氏が本拠地としていた地域である。先述した神宮寺遺跡は自然流路において多量の須恵器が出土しており、祭祀的な性格が強いとの評価で（伊藤・牛谷2004）、須恵器を用いた祭祀の経営主体については、横山古墳群の一角である長浜茶臼山古墳の被葬者が想定されている（松室1998）。近年では、当遺跡での祭祀は横山丘陵北部の勢力（坂田氏）主導の下、横山丘陵南部（息長氏）の勢力が参画した両氏族の共同執行と考察されており（大西2016）、両氏族は継体大王を支えた勢力基盤という共通点が指摘されている（辻川2003）。

坂田氏、息長氏および尾張氏の3氏族は、継体大王を支える勢力基盤であったという共通点を踏まえて、3氏族の間には政治的な繋がりがあったと想定してみる。それは、5世紀代の猿投窯製品や尾張型埴輪が当地域で出土することから、継体大王即位以前の時期における地域間交流、すなわち尾張氏族が坂田・息長氏族の本拠地へ、という構図である。冒頭で述べたように、両氏族の接触や関係性が一朝一夕で培われたとは考えにくく、継体大王即位以前から何らかの交流があったと想定すると、今回の湖北地域での猿投窯製品の出土はそれを傍証する事例であろう。また、この猿投窯産須恵器の出土から氏族間における一定の関係性を担保できるのであれば、継体大王を支えた支持基盤（ここでは坂田氏・息長氏・尾張氏に限ってではあるが）は、氏族ごとの単独ではなく、協働者としての意味合いを付与できると思われる。

また、黒田長山古墳群8号墳においても猿投窯の製品が出土しているが、息長氏の本拠地からは北方に所在しいささか遠方である。古墳の位置と交通ルート（高島・越前⇆尾張）と猿投窯製品の出土とを踏まえると、おそらく、黒田長山古墳群が点在する現在の長浜市木之本付近に勢力をもった氏族である伊香氏と尾張氏族とが、何かしらの関わりを有していた可能性がある。うがった見方をすれば、継大大王を支えた有力者（伊香氏）が当地域にも存在していた可能性を想定したい。尾張の工人ないしは尾張氏族がこうした湖北地域に赴く際には、尾張から濃尾平野へ、そして関ヶ原を越え西進しその後北進したものと考えられる。猿投窯製品の出土のみでここまで論じるのは甚だ恐縮ではあるが、1つの想定として念頭に置いておく。

(3) 滋賀県南部地域における猿投窯製品流入の背景（図7）

6世紀から7世紀にかけての猿投窯産の須恵器は少数ながらも南部地域から出土している。全体の出土状況から、先述したように湖東地域には猿投窯製品出土分布の空白が看取でき、また三重県との出土状況を比較した時にあまりにも出土数が少ない。従って、南部地域出土の猿投窯産製品の運搬については、尾張→濃尾平野→関ヶ原を越えて西進した後、琵琶湖南部を通過し当地域へ、というルートは考えにくい。となれば、三重県からの運搬ルートを想定できるだろう。図7-2は、『延喜式』に記された駅家およびそれに通ずる想定道路と三重県内から出土した猿投窯産須恵



1. 三重県内における当時の想定道路および駅家位置と猿投窯産の須恵器甕の出土地点を重ねると、その想定道路周辺に製品が流通していることが理解できる（図 7-2）。
2. 滋賀県南部地域出土の猿投窯産甕については、高市皇子が進路として使用した倉歴道から、製品が持ち運ばれたと想定したい（鈴鹿→伊賀国→甲賀）。

※1 は新田 2004 を筆者が再トレース
※2 は筆者作成
※3 は中村 2025 を参考に筆者作成
※4 は中 2004 を筆者が再トレース

図7　近江における猿投窯製品の流入想定ルート

器甕の出土地点とを重ねたものである。こうしてみると、特に7世紀代（東山44号窯式期～高蔵寺2号窯式期）の製品はおおむね古代交通路沿いの各消費地遺跡から出土している。こうしたことから、猿投窯の製品は図に示した道路に沿って三重県内の各地の集落に、そして三重県を横断して都城へ運搬されたものと考えられる。そのルートは、鈴鹿から伊賀国を中継地点として横断し、大和（藤原京・平城京）へというルートであろう。

では、三重から近江へ赴くには、どのルートを使用するのであろうか。中大輔氏の研究を参考に考えてみると（中2004）、『日本書紀』における壬申期の記載では、後の天武天皇である大海人皇子が壬申の乱時に吉野から美濃へ逃れるルートが詳細に記されており、成立期の駅家と交通路を窺うことができる。大海人皇子は途中、高市皇子一行と伊賀国積殖山口にて合流するのであるが、この高市皇子一行が使用したとされる道が近江へ続く交通路で、倉歴道（『日本書紀』天武元年7月辛卯）と称される。倉歴道や東海道の変遷を含め湖南地域の古代交通路研究は先学諸氏による多くの蓄積があり、古代官道のルートが想定されている。倉歴道は、天智天皇六年（667）の大津京が完成した後に大津京へ続く官道として整備されたと考えられるが、672年の壬申の乱によって近江朝廷が敗退したことに伴い、わずか5年半という短い期間で大津京は廃され、飛鳥浄御原宮に遷都される。この出来事に伴って、倉歴道も官道としての機能を失うようである。

湖南地域における猿投窯製品流入の背景としては、大津京の遷都に伴い倉歴道を通じた交通路が整備されたことにより、伊賀から近江へのアクセスが良くなったことによるものと考えられる。実際に大津京近辺である南滋賀遺跡からは、岩崎17号窯式期（7世紀後半）の黄土を塗布した猿投窯産の須恵器甕が出土していることから、大津京の完成に従い当地域へ猿投窯製品の貢納・運搬が行われた可能性が高い。しかしながら、上述したようにわずか5年半という短い期間で大津京は廃され、倉歴道も官道としての機能を失ったため、湖南地域に赴く必要性がなくなったことで当地域には多くの猿投窯製品は流通しなかったものと考えられる。

一方で、猿投窯の岩崎17号窯式期の時期比定にはある一定の評価が与えられる。猿投窯の編年と暦年代は、近年『愛知県史』（愛知県史編さん委員会2015）でまとめられ、岩崎17号窯式期はおおよそ7世紀後半に比定されている。大津京存続期間が667年から672年までという点を踏まえると、南滋賀遺跡出土の猿投産須恵器甕は667～672年前後の時期に持ち運ばれた可能性が高く、あわせて当時期前後に当須恵器甕が尾張で焼成されていたことになる。とすると、仮に1窯式20年と定め、岩崎17号窯式期に暦年代を付与するとなれば、660年から680年頃とここでは想定しておきたい。

5.おわりに

以上、滋賀県内における猿投窯産製品について、須恵器の貯蔵器種を中心に論じてみた。滋賀県内においては、5世紀から8世紀初頭にかけての時期に猿投窯で生産された須恵器はほとんど流通していないことが理解できるものの、一部の限られた地域においては製品の流入がみて取れる。その背景は先述した通りではあるものの、筆者の憶測もあり充分な検討とはいえない部分も多い。今後は、貯蔵器種以外の検討や都城が山城に移る8世紀以降の時期を含めての検討をおこない、都城が大和に所在した時代と山城に所在した時代とを比較することで、滋賀県内における猿投窯製品の出土状況の変遷を辿っていきたい。

註

（1）なお、ここでいう「猿投窯産」は、猿投窯の技術を受容して開窯した窯も含めることとする。猿投窯は先述した通り直径約20kmの範囲に点在する窯跡群であるが、その範囲外の周辺にも猿投窯の技術を受容した窯が操業している。代表例では、尾張旭市の城山窯や春日井市の尾北窯などがある。したがって、本論でいう猿投窯産はこれらの諸窯を含めていることを前提としたい。

（2）実際に、7世紀後葉の操業とされる猿投窯編年の標式窯である岩崎17号窯の胴部破片を調べてみると、胴部破片3735片のうち192片には本来猿投窯では認められない明瞭な同心円の痕跡を有する胴部片が認められた。

（3）これまで筆者は、猿投窯各窯の資料調査をおこなってきたが、カキ目を施した胴部破片はほとんど認められなかった。唯一、東山11号窯においては須恵器甕胴部片159片中2片のみカキ目が認められた。陶邑窯の工人が猿投窯に訪れている証拠となりうる資料ではあるが、尾張ではカキ目技法は定着しなかったものといえる。

（4）二子線は施文（波状文など）とセットになることが多い。1個体の須恵器甕の胴部を観察すると、二子線を巡らせる箇所の上ないしは下には必ず波状文が認められるが、沈線の周囲にはそれが認められない。二子線と沈線を施す意味合いは異なるものと考えられる。

（5）詳細は、今後別稿にて論じたい。

文献一覧（著者名・機関名50音順、刊行年順）

愛知県史編さん委員会（2015）『愛知県史別編　窯業1　古代　猿投系』

伊藤潔・牛谷好伸（2004）『神宮寺遺跡発掘調査報告書』長浜市教育委員会

伊藤禎樹（2004）「尾張型須恵器の出現」『韓式系土器研究会Ⅷ』韓式系土器研究会

岩崎直也（1985）「地方窯の上限と系譜を求めて（Ⅰ）」『滋賀考古学論叢第2集－江南洋先生還暦記念論集－』滋賀考古学論叢刊行会

岩崎直也（1986）「地方窯の上限と系譜を求めて（Ⅱ）」『滋賀考古学論叢

第3集－佐藤宗男先生還暦記念論集－』滋賀考古学論叢刊行会
岩崎直也（1987）「尾張型須恵器の提唱」『信濃』第39巻第4号、信濃史学会
大西遼（2015）「滋賀県長浜市神宮寺遺跡・越前塚遺跡出土の猿投系須恵器－古墳時代における広域流通解明への一資料－」『貝塚』71号、物質文化研究会
大西遼（2016）「消費地出土須恵器の分析を通した地域史復元－古墳時代中期の近江湖北地域を事例に－」『古代文化談叢』第77集、九州古文化研究会
大西遼（2017）「窯跡資料から見た東山窯開窯期の再検討」『考古学フォーラム』23、考古学フォーラム
大橋信弥（1996）「継体朝の成立と息長氏」『長浜市史　第1巻　湖北の古代』長浜市役所
小田裕樹（2019）「宮都における大甕」『第22回古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と大甕』奈良文化財研究所
尾野善裕・降幡順子（2023）「［研究ノート］西石根第7号窯出土の推定「黄土」調剤容器について」『刈谷市歴史博物館　研究紀要第4号　令和5年度』刈谷市歴史博物館
蒲生町教育委員会（1989）『ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書I（本文編）野瀬遺跡　堂ノ前遺跡　蒲生堂廃寺』
木村泰彦（1999）「甕据え付け穴を持つ建物について」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集－』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
斎藤孝正（1983）「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部研究論集LXXXⅣ』（史学29）名古屋大学文学部
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1981）『北陸自動車関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ－伊香郡余呉町所在黒田長山古墳群－』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1984）『国道365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－伊香郡高月町井口・柏原遺跡－』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1989）『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅺ－伊香郡余呉町桜内遺跡－』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2000）『近江国府跡Ⅱ大津市三大寺』
公益財団法人滋賀県文化財保護協会（2024）『滋賀県文化財保護協会調査報告第3集　大津市　南滋賀遺跡』
庄田慎矢（2024）『古代の酒に酔う　甕酒造りの共創プロジェクト庄田慎矢（編）』吉川弘文館
髙島悠希（2025）「滋賀県内出土の須恵器貯蔵器1－古墳時代中期を中心に－」『紀要』第38号、公益財団法人滋賀県文化財保護協会
高橋泰子（2015）「貯蔵穴から甕据付穴へ」『季刊考古学』第131号、雄山閣
田辺昭三（1971）「須恵器5須恵器生産の諸劃期」『日本美術工芸』第392号、日本美術工芸社
辻川哲朗（2003）「長浜市垣籠古墳の再検討」『考古学に学ぶ（Ⅱ）』（同志社大学考古学シリーズⅧ）同志社大学考古学シリーズ刊行会
津野仁（2017）「古代須恵器大甕の耐久-栃木県域の事例から-」『研究紀要』公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
中大輔（2004）「伊賀国」『日本古代道路辞典』古代交通研究会
中久保辰夫（2019）「近畿地方における須恵器の受容と普及－古墳時代の饗宴と土器生産－」『考古学研究会第2回合同例会『須恵器受容・普及の実態』発表資料』考古学研究会
中里信之（2014）「名古屋台地とその周辺における初期須恵器の再検討」『韓式系土器研究』XⅢ、韓式系土器研究会
仲辻慧太（2012）「貯蔵器による最古期須恵器窯の再検討」『明治大学と大阪大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム』成果報告書、明治大学大学院文学研究科
中村太一（2025）「畿内の駅家と主要交通路」『律令国家の辺境と交通－揺れ動く南北の境界と領域-川尻秋生・十川陽一・藤本誠編』八木書店
奈良文化財研究所（2019）『第22回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と大甕』
新田剛（2004）「伊勢国」『日本古代道路辞典』古代交通研究会
北陸古代土器研究会（1999）『須恵器貯蔵器を考えるI　つぼとかめ』
松室孝樹（1998）「姉川左岸流域における遺跡の動態－弥生時代後期から古墳時代にかけて－」『滋賀考古』第19号、滋賀考古学研究会
宮崎幹也（2000）『息長古墳群1　遺跡詳細分布調査報告書』近江町教育員会
宮成良佐・森口訓男（1996）「豪族と古墳」『長浜市史　第1巻　湖北の古代』長浜市役所
望月精司（2017）「壺・甕－貯蔵具－」『モノと技術の古代史　陶芸編　小林正史（編）』吉川弘文館

挿図典拠

図1　国土地理院地図をもとに筆者作成。
図2　筆者作成。
図3　伊藤2004、大西2015をもとに筆者作成。
図4　筆者作成。
図5　筆者作成。
図6　筆者作成。
図7　（新田2004）（中2004）（中村2025）をもとに筆者作成。

（たかしま　ゆうき：調査課　技師）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage

Vol.39　2026.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。

SINCE 1970

公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages